

Think globally, Act locally な薬剤管理

大谷美奈子<sup>1</sup>、小野雄一郎<sup>2</sup>、結城沙英子<sup>1</sup>、伊藤岳<sup>2</sup>、垣尾尚美<sup>1</sup>、岸本静佳<sup>1</sup>、松本敏明<sup>1</sup>、  
当麻美樹<sup>2</sup>

兵庫県立加古川医療センター 薬剤部<sup>1</sup>

兵庫県立加古川医療センター 救命救急センター<sup>2</sup>

【目的】

近年、敗血症や ICU における鎮痛鎮静など様々な診療ガイドラインが世界的規模で発表されている。今回我々は、ガイドラインに基づく薬物療法が浸透しているかについて検討を行った。

【方法】

2010 年から 2014 年までの 5 年間、当救命救急センターでの、敗血症性ショックにおける血管収縮薬、集中治療室における鎮静鎮痛薬の使用量を抽出し、その推移を検討した。

【結果】

敗血症性ショックにおける血管収縮薬に関しては、ドパミンの使用量が減少し、ノルアドレナリンの使用量が顕著に上昇していた。鎮痛薬ではフェンタニルの使用量が年々増加、併せて、鎮静薬ではミダゾラムとプロポフォールの使用量が減少傾向であったのに対し、デクスメトミジンの使用量が著明に増加していた。

【考察】

各種薬剤の使用状況の変化はガイドラインの変遷に準じていた。診療の標準化は医療の地域格差解消に大いに貢献しており、救命センターとしても Up-To-Date な医療を提供するためにガイドラインを無視することはできない。そのためには、医師のみならず、薬剤師も診療ガイドラインを正確に把握し、最新かつ適切な薬物療法を提案すべきである。